

学会だより

第104回 日本消化器病学会総会

山下 竜也, 金子 周一
(金沢大学附属病院消化器内科)

2018年の第104回日本消化器病学会総会は小池和彦会長(東京大学医学部消化器内科教授)のもとで、2018年4月19日(木)、20日(金)、21日(土)の3日間、会場は東京新宿の京王プラザホテルで行われた。今回で3年連続同じ会場で開催されたことになるが、会場とコンベンションが同じでも会長が異なることで総会の雰囲気がからりと変わると実感させられた。今回の総会の参加者は約6,500名と非常に多く盛会に終わり、小池和彦教授のもと、主催された東京大学消化器内科スタッフの先生方に心よりお祝い申し上げたい。

第104回の日本消化器病学会総会のメインテーマは「深化する多様性～消化器病学の未来を描く～」として開催された。小池教授は開会の挨拶の中で、東京大学消化器内科では約100名の医師が日夜、肝臓、上下部消化管、胆膵とさまざまな分野の研究・診療に明け暮れており、この様子からおのずと消化器病学の多様性に気づかされ、さらにそれが年々深まってきていることから、深化する多様性というテーマが浮かんだということを説明されていた。

このテーマに関連して、主題演題434題、プレナリー40題、口演244題、ポスター279題の、総数1,000題近い演題が集められた。特別講演は中釜 斉先生(国立がん研究センター理事長)が「我が国のこれからのがん対策」、浦野泰照教授(東京大学薬学系研究科薬品代謝化学)が「ライブイメージングと最新化学に基づく新たな医療技術の創製」、喜連川優先生(国立情報学研究所所長)が「AI、ビッグデータと医療」をテーマに講演された。また招請講演は秋下雅弘教授(東京大学加齢医学)が「フレイル・サルコペニアと慢性疾患管理」、深山正久教授(東京大学人体病理学)が「消化器病学と病理学の接点—

胃癌病理学を考える」をテーマに講演された。これらの特別講演、招請講演についてはすべて小池会長がお話を伺いたい方をお呼びしたとのことであったが、いずれも非常に興味深く今後の消化器病学の発展を考え興奮させられる内容であった。理事長講演では、下瀬川徹理事長から「日本消化器病学会の新専門医制度」の進捗状況に関する講演があり、会長講演では、小池和彦会長が「国民病である肝炎・肝癌の病態解明と克服への歩み」をテーマに講演され、会長の消化器病学への熱い思いが伝わってきた。

キャリア支援特別企画では、「若手優秀演題カンファレンス—症例に学ぶ」という新しい企画が試みられ好評であった。ハンズオンセミナーでは若い先生方が熱心にESDと小腸内視鏡の技術を習得しようとしていた。ポストグラデュエイトコースはほぼ満席で、午前・午後に分かれた10セッションの最新の話題を勉強した。総会と同時に国際学会(The 7th International Forum, The 9th Asian Pacific Topic Conference, The 5th International Topic Conference, The 3rd JSGE-UEG Rising Status Session)が併催され、国際的な学术交流が行われた。

来年2019年の第105回日本消化器病学会総会は当科の金子周一教授を会長として、新しい年号が始まったばかりの5月9日(木)、10日(金)、11日(土)に開催させていただくことになっている。学会のメインテーマは「消化器病学の使命～医療の創生、そして世界へ」である。消化器病学を見直しその使命を考え、新しい医療の創生と、それをさらに世界へ展開することを考えていただける魅力的な総会を目指し、より多くの方が参加したくなるような内容にしたいと考えている。